



令和2年4月23日

非常時に大学の研究者はどのような研究を行ったのか？ 『帝国大学における研究者の知的基盤——東北帝国大学を中心として』刊行

◆発表のポイント

- ・大学の研究者たちが戦時研究という形で戦争遂行のために協力をしてきたことが明らかになってきていますが、どのような思想背景のもとに協力してきたのかは明らかではありませんでした。
- ・本書は戦前・戦時期という非常時に研究者はどのような研究を行ったのか？その思想的背景は何だったのか？を〈知的基盤〉という視座から解き明かした論考です。

第二次世界大戦下に実施された学徒出陣、学徒動員や科学技術動員のもとで、帝国大学の研究者・学生、教育・研究環境すべてが戦時研究体制に取り込まれて行ったという状況の解明は深化してきています。しかしこれまでの研究では、戦時期という非常時において、研究者たちがいかなる思想的背景のもとに対応していたのか、明らかになっていませんでした。

この研究状況を踏まえ、本学大学院ヘルスシステム統合科学研究科の吉葉恭行教授、本村昌文教授、東北大学学術資源研究公開センター史料館の加藤諭准教授を中心としたプロジェクトチームは、戦時期という非常時に研究者たちはどのような対応を取り、それらはいかなる思想的背景によっていたのか、「知的基盤」という視座から明らかにすることを試みました。そしてその研究成果をとりまとめた論文集『帝国大学における研究者の知的基盤——東北帝国大学を中心として』を編集し、こぶし書房から3月31日に刊行しました。

今、大学とその研究者たちは、「軍事研究」といかに向き合うべきかという問題に直面しています。また東日本大震災時の福島原発事故を契機として、原発との向き合い方についての議論が再燃したことも記憶に新しいところです。非常な事態において大学の研究者はいかなる判断・行動をすべきなのか。「知的基盤」という新たな視座から研究者の思想的背景を解き明かす本書の試みは、この古くて新しい問いを再考するうえで有用なものと考えられます。

◆研究者からのひとこと

本書は、科学史、日本史、日本思想史、教育史といったさまざまな分野の研究者が、大学の研究者の「知的基盤」というキーワードを軸として論考をまとめた学際研究の成果です。今回は東北帝国大学の事例が中心ですが、今後は対象とする大学を増やし、時期も戦前・戦後と広げ、「知的基盤」がいかに変容してきたのか（しなかったのか）、さらなる展開を目指しています。



吉葉教授



PRESS RELEASE

■発表内容

<現状>

第二次世界大戦下に実施された学徒出陣、学徒動員や科学技術動員のもとで、帝国大学を中心として、学生や研究者たちが教育・研究の環境も含めて否応なしに戦時研究体制に取り込まれていった状況やその形成過程の解明は深化してきています。しかし、これまでの研究は、戦時期という変化の著しい非常時において、それぞれの研究者たちがいかなる思想のもとに戦時研究に対応していたのかを明らかにしたものではありませんでした。今、求められているのは、大きな枠組みを踏まえつつ、同時代の状況との関わりの中で、それぞれの対応をした研究者たちの思想の内面に接近することです。

<研究成果の内容>

現状の研究状況をふまえ、吉葉教授らのプロジェクトチームでは、研究視角として、戦前期から戦時期の帝国大学における個々の研究者らの研究姿勢とともに、その思考やその源となる「知的基盤」（物事の捉え方の背景にあるものの総称：学問的素養・組織体制・人間関係など）に着目し分析を行った成果を論文集『帝国大学における研究者の知的基盤－東北帝国大学を中心として』にまとめ、刊行しました。

戦前期から戦中期における帝国大学の研究者の知的基盤の形成の包括的考察検証をするために、第1章・第2章では、帝国大学の研究者の主要な登竜門である旧制高等学校の教育環境（教育方針・寮生活）について論じました。

第3章から第8章では、帝国大学における研究者らの思想やその知的基盤について論じています。第3章では、東北帝国大学法文学部初代学部長であり、法文学部の設置準備段階から教育カリキュラムなどを設計してきた佐藤丑次郎（1877-1940）の教育理念について、第4章では、東北帝国大学理学部生物学教室の初代主任教授を務め、ロックフェラー財団との提携による外国人講師招聘、浅虫臨海実験所、八甲田山植物実験所、農学研究所の設立など、学術研究体制の整備に尽力した畑井新喜司（1876-1963）の教育研究思想とその知的基盤について、それぞれ検討しました。

日本の大学における研究体制構築の大きな転機となったのが戦中期とされています。第5章では、帝国大学における附置研究所の体制整備と構想について、東北大学や京都大学における評議会議事録や概算要求などの原史料の分析を通して、附置研究所構想を含めた戦中期帝国大学の研究体制像の一端を明らかにしました。そして第6章では、戦中期の東北帝国大学における研究体制構築の背景を、総長と研究者の二つの役割を果たした熊谷岱蔵（1884-1962）の思想から検討し、その思想形成の礎となった知的基盤について点描を試みました。第7章では、歯車研究者として著名である東北帝国大学工学部教授の成瀬政男（1898-1979）の戦時研究を明らかにし、戦中期にどのような思想のもとに研究や社会活動に取り組んだのかを検討し、その思想を形成した知的基盤の解明を試みました。第8章では、東北帝国大学法文学部において日本思想史研究や教育に従事した村岡典嗣（1884-1946）の「知的基盤」について考察しました。

<社会的な意義>



PRESS RELEASE

2017年の日本学術会議の「軍事的安全保障研究に関する声明」に象徴されるように、現代の大学とその研究者たちは「軍事研究」といかに向き合うべきかという問題に直面しています。2011年の東日本大震災時の福島原発事故を契機に、原発との向き合い方についての議論が再燃したことも記憶に新しいところです。非常な事態において大学の研究者はいかなる判断・行動をすべきなのか。この古くて新しい問いを再考する上で、「知的基盤」という新たな視座を用いて研究者の思想的背景を解き明かす試みは有用であると考えられます。

■書誌情報

書名：帝国大学における研究者の知的基盤－東北帝国大学を中心として
編者：吉葉恭行、加藤諭、本村昌文
出版社：こぶし書房
刊行年月日：2020年3月31日

■研究資金

本研究は、科学研究費補助金（基盤C）に採択された「帝国大学における研究者の知的基盤に関する研究」（課題番号16K04518、研究代表者：吉葉恭行、2016年度～2018年度）の支援を受けて実施しました。

<お問い合わせ>

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科
教授 吉葉 恭行
（電話番号）086-251-7440 （FAX）同左



岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY



岡山大学は持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています。